

Case2

患者さんに寄り添い、ともに前へ

～花巻病院精神科外来での減薬への取り組み～

花巻病院は岩手県中部の花巻市にある精神科の専門病院です。同院では早くから精神疾患の患者さんに対する“減薬”に取り組んでおり、今回は「外来患者に対する単剤化・減薬化」が医療の質向上委員会のテーマです。

築き上げたノウハウを活かして



“減薬”はもともと医療費抑制を図る国の政策の一環でもあったため、同院では10年以上前から減薬

に取り組み、2015年には精神科の入院患者さんの2種類以下への減薬率97.8%（退院時）を達成していました。このため指標では、「精神科における減薬」項目のトップだったのです。そこで同院では既にあるノウハウを生かし、外来患者さんにおいてもあえて高い目標、“減薬目標97.8%”を委員会のテーマに選んだといいます。八木深院長はまず、次のように話してくれました。



「もともと減薬は精神科医療の大きな課題であり、何よりも患者さんの利益につながるのです」

あくまで自主性を重んじた減薬

減薬97.8%達成というテーマに対し、その中心となったのは医師と薬剤部、そして医事部門でした。そしてその方法とは、まず薬剤師が減薬してもよいと思われる薬の候補を医事部門にまわし、医事部門がさらに吟味してチェック表を作るというもの。減薬候補を明記したチェック表はさらに担当医にまわされ、最終的に医師が判断します。医師が了承すれば減薬が実行され、逆に早すぎると判断した場合は、今度は医師が減薬しない理由を明記して医事部門に戻します。薬剤師だけ、医師だけの判断で決定するのではなく、連携によるチーム医療で判断するのです。



減薬を決めても患者さんにその理由を含めて丁寧に説明します。減薬を強制するわけではなく、患者さんが不安がるようであれば無理強いはしないのです。また、減薬により調子が悪いようであれば再検討します。八木院長は次のような話もしています。

「減薬の提案をすると、たいてい患者さんの表情がほころびます。“たくさん薬が飲みたい”なんて人はまずいませんから」

減薬することで、“自分は良くなっているんだ”という一種の暗示も無視できないのです。



患者さんと一緒に目標 97.8%達成

ただし、睡眠薬を処方されている場合は、減薬後の経過をしっかりと確認します。多くの場合はだんだん慣れて問題ないそうですが、難しいようであれば似通った薬に代えるなどしてバランスをとるそうです。

また、患者さんから薬を減らしてみたいと逆に提案されることもあるといいます。このような場合も提案を受け入れ、やはりその後の様子をしっかりと追跡します。手術などと違い、精神科治療のスタンスは、あくまで患者さんの自主性を重んじ、ボールを渡すことだと八木院長。精神科ならではの考え方が見えてきます。

もともと同院では、医療の質向上委員会として試みる前の2016年4月の段階で、外来においても91.3%という減薬率を達成していました。同年12月には外来で3種類以上処方28人、2種類未満1,268人となり、入院患者と同じ97.8%を達成したのです。

寄り添い、想像しながら、ともに前へ

八木院長は次のように今後の展望についても話しています。

「これからは地域の時代。介護や認知症のように、精神疾患でも訪問診療が重要になるでしょう」

精神に疾患をもたらした真の原因を知るためには、家庭環境を知ることが大切です。同時にイマジネーションも重要で、患者さんが本当に困っていることをいかに想像できるか。想像力を働かせて患者さんに寄り添うことが大切です。そうした思いが八木院長考案の標語“寄り添い、想像しながら、ともに前へ”に集約されています。

精神科領域は特に数値化しにくい領域だと八木院長。しかしそれでも、築き上げたノウハ



ウを、委員会活動を通じて他の領域にも拡大し、患者さんの QOL 向上につなげられるように改善に取り組んでいます。

■花巻病院（岩手県花巻市）



精神疾患医療の専門病院。医療観察法病棟（心身喪失などの状態で重大な多害行為を行った人に対する医療）併設、当事者研究（自分の病気を事例として自分で発表）など、全国的に注目されている活動も多い。